［クロニック］

書物の宮殿を訪ねる

篠原 学

目を開くと、風景はもう動き出している。窓枠に乗せた右腕が、午後の日差しに灼かれて火照っていた。発車までのわずかな時間に、うたた寝してしまったらしい。徐々に速度を上げて流れ去る街並を見下ろしながら、首元の汗を拭う。列車はほどなくして次の駅に到着した。スーツケースを片手にホームに佇む人々の軽装が、新しい季節が廻ってきたことを実感させた。

2011年3月下旬のある日、私はジュネーヴからパリへと向かうTGVの中にいた。そのときの住まいはパリにあったので、本来なら「向かう」ではなく「戻る」と言ったほうが実情に即しているのだが、それは実感に即した表現ではなかった。その時分の私に、パリは戻っていく場所とは思われなかったから。眠気覚ましに熱いコーヒーと、チーズケーキを注文する。名刺大のカードが、ケーキの小皿の下に敷かれている。そこにはこう書かれていた。

Cheese cake / Cheese Cake / *Cheese Cake*

気がつけば、私は幾度となくその三行を追いかけていた。そうかチーズケーキはgâteau au fromageでもkäsekuchenでもなく、世界中どこでもチーズケーキなんだな、と思う。私はなぜか愉快な気持ちになって、けれど自分が、今、どこでもない場所にいて、どこでもない別の場所へと運ばれていくような気がした。カードに視線を落としたまま、その思いの手触りを確かめるように、私はしばらくの間じっとしていた。読みさした本の、続きの頁を開くことも忘れて。

結局、パリに着くまで鞄から取り出されることのなかったその小説は、次のように始まっている。「外国へ向けて、職を得た滞在をふくむ、ある長さの旅に出るたび、見知らぬ風土で根なし草となる自分が、ありうべき危機になんとか対処しうるように――すくなくとも心の平衡をたもちうるようにと、ひとつの準備をすることにしている。それはただ、出発までの時期読みつづけた一連の書物を、旅に携行することにすぎぬが」[1]。ひとりの作家の精神状態と、それへの配慮を綴るこのような言葉から始まる小説が、彼にとってより現実的な、もうひとつのありうべき危機である自身の死へと、焦点を移していく。自分の死後残されることになる障害を持つ長男のために、彼が属している新しい世代のために、作家は「この世界の何もかもについての定義集」を書こうとする。小説はその取り組みの誠実な記録であり、そうした仕方で小説を書き続けることが、世界に少しずつその定義を与えることでもある。

パリ2区の古書店で数年ぶりに手に取った大江健三郎の『新しい人よ眼ざめよ』を、翌日からの短い旅行に携えていったのは、しかし、小説の冒頭に提示された「方法」に、ごく表層的な水準で、私の習慣が一致していたからにすぎない。ごく表層的な……というのも、その旅のあいだ、私の心がつねに平衡を保っていたとは言い難いように思えるからだ。といって、感情のせめぎ合いのようなもの、そうした「何か」があったわけでもない。私はただ、自分のいるべき場所がここではないという、居心地の悪さを感じていたのである。

その居心地の悪さが何に起因するものかはわかっていた。十日ほど前、私はパリの仮の住居で、これまでにない災禍を日本にもたらした地震の報道に接したのだった。パソコンの前に座って、いくつものニュースサイトを見続けた数日のあいだ、私の心を占めていたのは空白であり、空白としか言いようのないものだった。おそらく、私は帰りたいと思っていたのだ。東京に？――東京に。けれどそれは正確でないような気もした。東京に帰ったとして、私がある場所から別の場所へ移動するというただそれだけのことで、心の中の空白が空白でなくなることはありえないように思われたから。自分のいるべき場所はここではないかもしれない。その疑いは、ここにいなくても抱くことができる。いや、正確には、ここがパリであったり東京であったりする必然性はない、と言うべきだろう。ここが偶さかにどこなのであれ、私のいる場所が必然的に「ここ」なのだから。その意味で、私はどうしても「ここ」を離れることができない。私にとって親しい世界が相貌を一変させてしまうような「向こう側」、大好きなお菓子がもうその名前で呼ばれることのない「向こう側」に行くことはできないのだ。雑然と、しかし適度に散らかった部屋の中で、あの日私が感じていたのも、まさにその「向こう側」に在りたいという、満たされようのない欲求に違いなかった。

私は「ここ」にいて、「ここ」にしかいない。そのような「ここ」に在ることを余儀なくされた「私」は、ある特定のどこかにいる、固有の存在であることから逸脱して、誰であれ思考する者がその位置を占めることのできる「私」であるはずだ。「私」は私である必要はなく、誰であってもよい。にもかかわらず、そうした「私」がいる「ここ」は、ある地点AやBの隣にマッピングされる点のことではない。なぜ、そのように言えるのか。一般的な一人称としての「私」は、任意の点AやBを「ここ」として存在する誰かであることができる。しかしそれは、そこから世界が開けている原点としての「ここ」を複数思い描くことができるということであり、どの「ここ」も両立することは不可能である。その不可能性を導き出すのは、ほかでもない「私」の一般性である。そして、どの「ここ」をとっても、その視点からの眺望の中に「私」はいないはずだ。もし「私」がそこにいるとすれば、「私」はすでに、そこから世界が開かれている「ここ」に立つことをやめ、俯瞰的な視点に立っていることになる。そのような「私」は、他に妥当するものとして前提された一般性であることから逸脱している。「私」のいる「ここ」は、「ここ」にしかいない「私」が地図の上に書き記すことのできない――原理的にできない――場所のことである。そのような場所は、「私」にとって失われていると言えるのではないだろうか[2]？

親しく付き合ってきた友人が結婚する、その立会人として半年ぶりにジュネーヴの土を踏んだ私に、駅まで迎えに来てくれた彼が英語

で訊ねる。「懐かしいかい？」うん、と私は頷く。懐かしいに決まっている。私にとってジュネーヴは、パリでの日々に先立つ二年間を過ごした特別な場所なのだから。「まあ、くつろいでいってくれよな（Make yourself at home）」自分の家だと思って。私はもう一度頷き、しかし頭の中で、その一句を誤って@homeと変換している。私はここにいる。「ここ」にいるのだ。「ここ」から世界につながっていて、だから世界のどこにもいない。「ここ」が私の家であるとは、私が今、旅をしているということである。

帰るべき家から遠ざけられているとき、ひとは「根なし草」の感覚を持つ。他方で、その感覚は安心に通じてもいる。私は「ここ」にいる、帰るべき家などほかにありはしないという安心に。だが「私」にとって「ここ」は失われているのだ。

そうした考えを敷衍すれば、出発まで読み続けた本を携えて旅に出ることは、アイデンティティを確保するために「私の家」を持ち歩く作業ではないことになる。そこでは、戻るべき家が「ここ」であり「ここ」以外にないということが「根なし草」であることの意味なのだから[3]。出発前にある場所で開いた頁を、別の場所で開く。そこには何の違いもなく、「私」はどこにいるのであれ同じ風景を見ているのだ、と言うことができる。その意味でこそ、書物を世界の比喩と見做すことはできないだろうか。書物は言語によって世界を仮構することで、その比喩となるのではない。そうではなく、読み手との関係においてつねに同じ風景として現れ、そのことによって、私が「ここ」にいて「ここ」にしかいない「私」であることの自覚を読み手にもたらすからこそ、世界の比喩でありうるのだと考えることはできないだろうか。もし、そう考えることができるとすれば、書物に親しむことは、そこから教訓を読み取るのとは別の次元で世界の予習をすることであり、旅先で読みかけの書物を開くことは、「ここ」であることのうちに、そのただなかに、「根なし草」の身体感覚とでも呼ぶべきものを探り当てる営みであるだろう。「私」に対してはじめから親しいものでしかありえない世界に、私たちがあらためて馴染むことができるとすれば、それは読むことにおいてでしかありえないとさえ――それはさすがに性急にすぎると知りつつも、言ってしまいたくなる。

冬の夜、ひとりの旅人が重い扉を押した。その建物の内部には、膨大な数の書物が、無限に続くのではないかと思える書架に収められている。そこは『書物の宮殿』[4]（*Le Palais des livres*）である。

書物は項目ごとに分類されている。案内役を買って出てくれた老人は、彼自身作家であるらしく、旅人を感心させるほど豊富な知識を持っている。「この棚は『詩人の国』と呼ばれている。そう、スタンダールの言葉だ。その向こうが作家の私生活に関する本、出口付近には立ち去ることをテーマにした本……恋愛小説の棚もあるよ、お望みならね」そう言いながら、外目には齢九十に達しているようでもある老人はけっして歩みを止めることなく、手近な棚から無作為に本を取り出しては、すでに長い旅を経て、ひとかたならぬ疲労を感じている宮殿の訪問者に、その本の「尽きせぬ魅力」を延々と語る。

旅人がおずおずと訊ねる。「すみません、ちょっと休ませてもらっていいですか」

「ああ、いいよ。ちょうどそこに待合室がある」老人は上機嫌だ。「待合室という場所が私は好きでね。小説の題材がごろごろ転がっている。ひとつ訊くけど、君はただ『ここ』にいて、待っているだけの時間は無駄だと思うかい？
本当の生を生きていないだとか、そんなふうに」

旅人は生返事をする。

「それじゃ、この部屋で待っていてくれたまえ」

「ありがとう。いつまで待っていればいいですか」

「ずっとだ」老人はそう言って、扉を閉める。

ひとり残されて、旅人はあっけにとられている。もちろん、ずっと待っているわけにはいかず、いつかは帰らなくてはならない。だがどこへ？　彼は呟く。「いつかはこの文学の楽園から、ふたたび日常へと降りていかなくてはならない。そこでは書物の中ほど本物は本物らしくないだろうし、感情だって厄介だ。月曜日には週末が待ち遠しく、かといって日曜日には月曜日を待つしかない。バカンスを待ち、定年を待ち、ときには伴侶の死を……いや、それはともかくだな、どこにいても何かを待つことになるんじゃないか」[5]それならば、と彼は思う。今待つことにして、なぜいけないのか。「ここ」で本を読んでもいいはずだ。なにしろこんなにたくさんあるのだから。本棚にはコンラッドがあり、ウルフがあり、カミュがあり、もちろんベケットがあり……ロジェ・グルニエ？　どこかで聞いた名前だが……まあいい、手始めにこいつから読んでみることにしよう。いい暇つぶしになるだろう。

もう少し旅を続けていよう。書物を携えて、とうとう家に帰れない迷子になっても。

1　大江健三郎『新しい人よ眼ざめよ』講談社文庫、1986年（単行本の刊行は1983年）、9頁。

2　「ここ」に在る「私」をめぐる哲学的考察については、永井均『〈私〉の存在の比類なさ』（1998年、勁草書房）とりわけI「他者」における「独我論的な〈私〉が隣人を持たないこと」に関する議論が啓発的であった。本稿のこの箇所の叙述も、基本的には永井の視角に依拠し、その土俵の上でなされているが、視点の問題に関する形式的議論だけで「私」の在り方を記述しようとしている点で、私の立場は、永井の論文では認識論的であるとして退けられているものに近いと思う。

3　「根なし草」の意味をこのように理解し直すとき、私は私の（「私」の、ではない！）個人的経験に引き寄せて、大江の小説を冒頭から誤読している。たとえばそうすることによって、大江の小説を、その語り手がブレイクを読むのと同じ仕方で読むこともできるのだ。

4　Roger Grenier, *Le Palais des livres*, Gallimard, 2011.

5　次の箇所を意訳した。*Ibid.*, p. 42.